
大剣の女騎士

弥生雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大剣の女騎士

【Nコード】

N8339Q

【作者名】

弥生雨

【あらすじ】

騎士の町フェイガンで腕試しをしていたホウマ族の剣士フェン・リール。

腕試しに勝ち、気分を良くしていたフェンだったが、「くだらない」と人だかりの中から冷たい声が飛ぶのを、確かに聞いた。

その声の主は、異端とされる女騎士で――。

女騎士が主人公の、短編連作ファンタジー？オデッサ戦姫？第一話です。

全五話完結予定。

？天使の微笑？シリーズとつながりがあります。

『クレイモア
大剣の女騎士』

フェン・リールに怖いものは何もなかった。

族長から、お前はいずれ大剣士となる器の持ち主だ、お前が新たな族長として迎え入れられる日が待ち遠しくて仕方がないと言われ、友人達からは、やれ至高の族長候補、やれ未来の剣聖などと持て囃されてきた。

また、その言葉に偽りがないと自分で信じていた。

俺は大剣士、いずれは剣聖とまで呼ばれる存在になるだろうと信じて疑わなかった。

さらなる経験を積み、名を馳せるために部族を飛び出し、東に高名な剣士あらば東へ足を運び、西に腕利きの傭兵ありと聞けば西へ足を運び、片っ端から腕試しをする日々。

見せかけの腕自慢たちを、フェンは次から次へと潰していった。

みんな口ばかりだな。本当に強い剣士とは俺のような者を言うのだ。

俺は未来の剣聖。向かうところ敵なしだ。

自信に満ちあふれたフェンは、今日も腕っ節の噂を聞きつけ、騎士の町フェイガンで腕試しをしていた。

相手の剣を得意の居合いで叩き落とし、のど元にカタナの切っ先を突きつけ負けを認めさせると、腕試しを見守っていた大衆から大きな拍手が飛んできた。

大喝采に気分を良くして、フェンが得意げにカタナをさやに収めるとき、彼は、人集りの中から、

「——くだらない」

どこか忌々しそうな冷たい呟きが発せられたのを確かに聞いた。

それは、はつきりと通る、美しい声だった。その呟きで、瞬時に喝采が止んだ。

腕試しを見守っていた大衆が、声を発した人物に一齐に視線を送る。

声の主は、歳のほど十九か二十の、クレイモア大剣をグレイウス一振り背に、そして二本の片手剣を左右の腰に提げた若い騎士だった。

しかもこのフェブラント大陸では、異端と称される女騎士だ。

フェンが、人々が、女騎士に釘付けになった。皆一様に、惚けたような面を晒す。

それは女騎士の、まるで魂を抜き取らんばかりの美貌によるものだった。

妖艶も、妖艶——それでいて、どこか気高い。

これほどまでに凜とした女性を、フェンはその二十一年の人生で一度も見ることがない。

不気味なまでに美しい女騎士は、フェンを冷たく睨み付け、もう一度「くだらない」と漏らした。

その言葉で、はっと我に返ったフェンは、とたんに頭へ血が上ってくるのを感じた。

「なんだって？」

語気を強めて聞き返すと、女騎士は即座に答えた。

「くだらない、と言ったんだ」

突き刺さるような、声色だった。

「何がくだらないってんだ……？」

フェンが、噛みつくように呟く。

「剣だよ。お前の、剣だ」

女騎士は、そう言った。剣——即ち、剣術である。

「そんな軽薄な剣じゃ、見せかけの腕自慢は倒せても——誰も、殺せやしない」

軽薄な、剣——フェンの剣術をそう博したのは、彼女が初めてだ

った。

自信を持っていた剣だった。この剣で、いずれ俺は剣聖にまで届く大剣士になる。そう信じていた剣だった。

それを――あっさり、断ぜられた。？軽薄な剣？と。

一瞬だけ、フェンは頭が真っ白になった。

しかし、即座に己の底の方から突き上げてきた猛烈な怒りで自分を取り戻し、思わずカタナの柄に手を掛けた。

「軽薄な、剣……だつて？」

フェンは、口元が引きつらせている。

ふと、フェンの視界に、先ほど腕比べをした剣士の、叩き落とされてやった剣が目に入った。

フェンは、それを足で引き寄せ、蹴り上げて宙へ浮かせた。そして、

銀光が閃いた。

耳を貫くような金属音が連続で響き渡るや、宙の剣は鮮やかに七つの金属片へと切り裂かれ、落ちていった。大衆から、息を飲む音が飛ぶ。

抜く手も見せぬ居合いを披露したフェンは、かちん、と鐸を鳴らす。

「この剣の、どこが軽薄だって言うんだ？」

俺が本気を出せば、ざっとこんなものだ……思いながら、フェンは不敵に笑う。

しかし女騎士は意に介した様子もなく、鼻を鳴らしたただだった。

フェンは口元を引き締め、言う。

「あんたで試してみたっていいんだぜ……？」

構えを解かず、じり——とフェンは一歩前へにじり出た。

女騎士は面白くもなさそうに、ただ、フェンを見据えていた。

その瞳には、氷のような冷たさしか宿っていない。

「場合によっては——けがでは、すまなくなるぞ」

警告でもなく、強がりでもなく、ただ当然の結末を伝える——そんな口調で、女騎士が呟いた。

「さて——そいつはどうか」

さらににじり出て、フェンが返す。

女騎士は、そっと目を閉じて、重々しく溜息をついた。

「バカには、何を言っても無駄か——」

呟くや、女騎士は背の大剣——その柄に手を掛け、ぐつと腰を落とした。

抜刀の構えである。

しかし、剣を抜く気配はない。

フェンが訝しい顔で見返していると、女騎士はその美しい顔に、ぞつとするような嘲笑を浮かべた。

「どうした？ 居合いで勝負してやるんだ。そんなつまらない顔をするのではないだろう」

「居合い……、だと？」

表情を変えずに、しかしフェンは驚愕していた。

女の腕で一振りすれば、間違いなく肩が外れるであろう得物で、居合い？

しかも、こともあるうに居合いを得意とするこの俺に、大剣で居合い勝負だと？

フェンは自分の中の何かが、音を立てて切れたのを感じた。

吹き上げてきた怒りに自分を抑えきれず、フェンは居合い使いにあるまじき行動をとった。

なりふり構わず、突っ込んでいったのだ。

あの女が得物を抜くよりもっと早く、この剣を叩き込んでやる！

その一心で、得意の間合いへ踏み込むと同時、一刀が奔った――
刹那、

がぎゃん、という甲高い音が、辺りに響き渡った。

その音で我に返ったフェンは、己のカタナがはじき飛ばされていたことを知った。

そして首筋には、大剣の刃が突きつけられているではないか。

フェンがぼかんとした表情で、女騎士を見返した。

女騎士は、ただ冷たい瞳で自分を睨み付けているだけだった。

「……………」

フェンが何かを言おうとするが、何も言えない。

「自分の未熟さに感謝するんだな。でなければ、今頃首を飛ばしてやっつてるところだ」

低く呟きながら、女騎士は大剣を納めた。

「……………時間を無駄にした」

忌々しそくに吐き捨て、きびすを返して、女騎士は歩き出した。

人波が、彼女を避けるように割れてゆく。

その後ろ姿を、少しの間、フェンは呆然と見つめていた。周りでは、野次馬たちがざわめきながらその場を後にしてゆく。

取り残されたフェンは、はじき飛ばされたカタナと、遠ざかってゆく女騎士の姿を交互に見た。

負けた。剣で、初めて負けた。しかも、相手は自分よりも下と思しき女だ。

今までに手を合わせてきた、どんな奴らとも違う——凄まじい、使い手。

強い——他の何は分からないまでも、それだけは、明らかだ。

ごくり、とフェンは生唾を飲み込む。

大敗を喫した、憎むべき相手のはずなのに、フェンの心は高揚していた。

彼女の美貌にでも当てられてしまったか——そうかもしれない。

あの強く美しい女騎士に対する興味が、身体の奥底からわき上がってくる。

フェンはカタナをひつつかみ、鞘へ納めながら女騎士の後を追った。

「お、おい——」

どどん遠ざかってゆく後ろ姿に、大声を飛ばす。しかし、女騎士は振り向かない。

「ちょっと、待ってくれ！」

走って、なんとか彼女に追いついたフェンが横に並ぶ。女騎士は、冷たい舌打ちを一つ。

「ついてくるな」

静かに言い放つが、フェンは聞かない。

「あんた、強いんだな。名前は？ どの出なんだ？ 剣の流派は？」

まくし立てるように尋ねるフェンへ、不意に立ち止まった女騎士が腰の片手剣を抜き放ち、首筋へ突きつけた。

「ついてくるなど、言っている」

殺意の籠もった瞳で、フェンを睨み付ける。

その瞳は深く、濃い闇に覆われていた。全てを拒絶するような、深い、深い闇。

「待ってくれよ、俺はただ……」

「私は、貴様に用はない。消えろ」

殺意のまなざしをくれてから、女騎士は片手剣を納め、さつさと歩き出す。

フェンは仕方なく立ち止まり、観念したように肩を竦めた。

(……なんて、そう簡単に消えるわけねえだろ)

町を発ち、かなり先に行く女騎士の背をこっそり追いながら、フェンはほくそ笑んだ。

女騎士は、たった一人で黙々とジエンガル草原を進んでゆく。

(異端の女騎士で、凄腕の剣士。おまけに——美人。こんな面白そうなの、放っておけるかっての)

強さの秘密を、突き止めてみたい。彼女に対する興味は、もはや押さえきれないのである。

しばらく進んでいた女騎士は、はたと足を止めた。

フェンは、その様子を草むらに身を隠しながら見ている。

女騎士が舌打ちをもらし、

「出てこい、ホウマ族の剣士。ついてきているのは分かってるんだ」

底冷えのする声で言った。

どきりとするフェン。しかし、その場を動かない。

沈黙の後に、女騎士が続ける。

「無理にでも、叩き出してほしいようだな……」

言いながら、腰の片手剣に手をかける。

「待った、待った。分かったよ……」

フェンは観念したように立ち上がり、両手をあげた。

「私は、ついてくるなと言ったはずだが？」

「いやあ……」

ははは、とフェンは空笑いをする。

「まあ、なんていうか……あんたにね、その、見ほれちゃって、ちよつと興味が……」

女騎士が忌々しげに溜息をつく。

「馬鹿が……。貴様のせいで、余計なものがついてきた」

不意に、女騎士はフェンの左側の草むらを睨み付けた。

「さつさと姿を現したらどうだ。貴様らがいることも、分かっているんだ」

やや静まりかえった後、草むらが、がさがたと揺れた。

そして、屈強な騎士の男が三人、姿を現した。

「私になにか用か？」

「なに……、用ってことはないんだけどな」

「そうそう、あんたがちょっと他に見ない美人だからさ」

「是非ね、お近づきになりたいと思ってね……」

下卑た笑い。フェンは胸くそが悪くなるのを感じた。

魔物や悪人から、人々を守る騎士——それが、ここまで堕ちたものか……。心の中で、舌打ちをもらす。

ふ、と女騎士が呆れたような溜息。

「そうだな……、そのハウマ族の剣士を殺せたら、考えてやってもいい」

とんでもないことを、女騎士は言っただけだ。思わずフェンが女騎士を見つめる。

彼女は、せせら笑っていた。

「腕試しが好きなんだろう？ その自慢の居合いで、軽く片付けてやったらどうだ」

フェンは、背筋に寒気が奔るのを感じた。

騎士の男たちが、笑みを口に、ゆっくりとフェンを取り囲んでゆく。

「嬢ちゃんよ、吐いた言葉には責任持てよな」

確認するように、聞いてくる騎士の男。

無論だ、と女騎士は答えた。

「ま、そういうわけだ。兄さん、あんたには恨みもなにもないけどさ、ちよっと、死んでくれ」

言いながら、すらりと剣を抜く。

（——冗談じゃない！）

フェンは姿勢を落とし、カタナに手をかける。

ちくしょう……、あの女、美人のくせに中身はとんだあばずれだ！

絶えず周囲を見渡しながら、フェンは身構えている。

一人が、動いた。

まったくためらいのない、殺すための一撃。

（人を守る騎士が、聞いてあきれるぜ！）

さらに体勢を落とし、居合いで足をなぎ払うフェン。

支えを無くした男が、悲鳴をあげて倒れた。

間髪を入れずに、背後から殺気。振り返りざまに、斬り上げを放つフェン。

男の腕が斬り飛ばされてゆく。思わずぼかんとした男に、フェンは体当たりをぶちかました。

悲鳴を上げて倒れる男の足をカタナで突き、動きを封じる。さらなる悲鳴があがった。

最後の一人が、フェンに突進しながら斬りを見舞う。

咄嗟にフェンは、それをカタナで受け止めた。

鍛え抜かれた男の、その一撃は重く、カタナの峰を空いた手で押さえなければ、止めることができなかった。

がら空きになったフェンの腹へ、その男が踏みつけるような蹴り。

息をつまらせて、身を折ったフェンが後ろ向きに倒れた。

カタナを取り落とし、呻くフェン。顔を上げると、男の勝ち誇ったような顔。

「あばよ、兄ちゃん」

死ぬ。それだけが頭に浮かんだ。

男が振り下ろそうとしている剣の軌道が、ひどくゆっくりにみえた。

そして、耳をつんざくような音。

騎士の男の一撃を、女騎士の大剣が止めていた。

こちらに一瞥くれた女騎士に、強い叱責の色。

男の剣を軽々とはじき返して、女騎士は容赦なく一太刀を浴びせた。

血しぶきをあげて、男がどう……と倒れた。

「戦いを軽んじているから、そうなるんだ……」

女騎士の、冷めた声。

血を払い、女騎士は大剣を納めた。

フェンが恐る恐る立ち上がり、カタナを取りながら、女騎士が斬り倒した男を見た。

まぎれもなく、男は絶命していた。

「情けをかけるようでは、お前、いずれ死ぬぞ」

痛みに呻く二人の騎士のことを、言っているようだった。

「でも、何も殺すことは……」

きつ、と睨み付けられ、フェンは思わず黙り込む。

「お前は甘い。殺さなければ殺される——そんな状況なら、迷いなく殺すべきだ。さもなければ、自分が死ぬことになる」

言い捨てて、女騎士はフェンに背を向けて、歩き始めた。

「あ……、ま、待ってくれよ！」

その声を通じたのか、女騎士は足を止めた。

不審そうに、辺りを見回し始める。そして、舌打ち。

「血のおいをかぎつけたか。まったく、次から次へと——。お前は、疫病神だな」

言い返そうとして、できなかった。フェンも違和感を感じ取ったからだ。

何かが、迫ってきている。がさがさと、草むらから不審な音。

ちよつとやそつとの数ではない。何が集団で押し寄せてきている、そんな気配である。

女騎士は振り向いて、まっすぐにフェンを見据えた。

鋭い視線に射貫かれて、さらに身を固くするフェン。

物音が、気配が、どんどん高まってゆく。

「お前、私についてくるつもりなのか？」

「……ああ、できれば、そうしたい」

答えるフェンへ、鼻で笑って返す女騎士。しかしその嘲笑は、どこか寂しげでもあった。

「これを見ても——果たして、そんなことが言っていられるかな」

呟くように言うと同時に、腰の片手剣を一気に抜き放つ女騎士。

合わせるように、草むらから飛び出してきた何かが、女騎士へ飛びかかっていった。

犬のような、それ——獣魔ヘルバウンドは、あっけなく女騎士に両断され、息絶えた。

魔物の、青い血が舞った。

次々と飛び出してくるヘルバウンドを、女騎士が片っ端から斬り捨ててゆく。

フェンも、自らを襲うそれを、何とか迎撃していた。

魔物に食い散らかされているのか——先ほどの、騎士たちの悲鳴が響いている。

さらに草むらから、人狼ヴォルフ、そして昆虫のような外見を持

つ甲魔ガルファングまで現れた。

フェンは思い出す。このジェンガル草原は危険な魔物がたびたび現れるということ。

ふと、大空から奇声。

見上げると、鳥のような上半身と人のような下半身を持つ、翼魔ハルピュアイが舌なめずりをしているではないか。

「数が、多いな……」

ヘルバウンドを斬り飛ばして、女騎士が呻くように言った。

そして何を思ったのか、両手の片手剣をひゅん、と宙に放った。

左腕一本で背の大剣を抜き、右手のひらを空に向けて、一言。

「よく見ている——ホウマ族の剣士！」

次の瞬間、フェンは己が目を疑った。

宙に放られた片手剣が、まるで意志を持ったように、激しく回転しながらハルピュアイへ迫っていったからだ。

女騎士が手を引けば、ハルピュアイを真つ二つにした片手剣が、軌道を変えて別のハルピュアイへ突っ込んでゆく。

まるで、彼女が手も使わずに、片手剣を操っているように。

その間にも、自らに殺到する魔物の群れを、その大剣で屠りさつてゆく女騎士。

次から次へと、血の雨を降らせながら、ハルピュアイたちの亡骸が墜落してゆく。

空を片付けた片手剣は、急降下。女騎士の指揮の下、辺りの魔物たちを斬り伏せ始めた。

女騎士も、ガルファングを甲殻ごと叩き斬り、息もつかずに次の魔物を斬って捨てる。

初めて見る、凄まじく、そして異様な光景に、フェンは完全に飲み込まれていた。

（俺は、夢でも見ているのか……）

茫然と、女騎士のその姿を見つめる。刹那、

耳元で、風を切る音。次いで、魔物の咆哮。

フェンは背中に、なにか暖かいものが降りかかったのを感じた。

耳をかすりかねないほどすぐ近くを奔った片手剣の一つが、フェンの後ろに居たヴォルフの心臓に突き刺さったのだ。

「ぼさつとするな！ 死にたいのか！」

女騎士の怒鳴り声。

はっと我に返る。魔物を屠る修羅と化していながらも、周りを冷静に見渡せる余裕がある彼女に、フェンは震えるような感動を覚えた。

転瞬、襲いかかってきたヴォルフを斬り倒し、フェンはカタナを納め、構えた。

「来いよ……獣ども！」

そして、フェンもまた、魔物を屠る修羅と化した。

まもなく、二人を襲った魔物の群れは、全滅に帰することとなった。

おびただしい魔物たちの亡骸が、辺りに散らかっている。

フェンも、女騎士も、返り血でべつとりと濡れていた。

女騎士が大剣を、そして舞い戻ってきた片手剣を納める。フェンも血を払ったカタナを、鞘へ納めた。すっかり息が上がっていた。

女騎士の方は、僅かに呼吸を乱している程度だった。

「あんた……、やっぱり、強いんだな……」

呼吸を整えながら、フェンが笑う。

「それに、あの芸当……、いったい、何者なんだ、あんた」

訊ねると、女騎士は面白くもなさそうに鼻をならした。

「お前には想像もつかない種類の人間もいる、ということだ」

言つて、手のひらをフェンの方に向ける。

と、フェンのカタナが、かたかたと震えだし、そしてあつという間もなくフェンの腰から離れたそれが、女騎士の手に渡った。

まただ……と、フェンは目を丸くする。

「私には、常人には計り知れない？力？がある。今のように、手を触れもせずに、ものを動かすことができる？力？……」

カタナを、フェンへ投げて返す。

「忌々しいこの？力？ゆえに、私は騎士になった。そしてこの？力？は、どうも厄災を招き入れてくるらしい。お前や、あの騎士ども、そして、先ほどの魔物たちのように……」

女騎士は己の、血にまみれた姿をあざけるように、寂しそうに笑った。

「この通り——私の手は血にまみれている。そして、私の進む道もまた、血にまみれている。これから先も、それがずっと続いていくだろう。死と隣り合わせの、修羅の道……」

顔をあげ、彼女は、フェンを強い眼差しで射貫いた。

「それでもお前は、私についてくるつもりなのか？」

フェンは、黙した。ややあってから、はは——と笑いを口にした。

「おっかないことは、分かったかな。——確かに、あんたと一緒にいると命の危険があるかもしれない……。でもさつき、一緒に闘ってみてさ、思ったんだ。あんたについていけば、俺は強くなれるかもしれない、って……。だから、俺はあんたと行く。行かせてほしい……」

すらりとカタナを抜き、切っ先を空へ向ける。まるで、祈るような構えを取るフェン。

「この剣にかけて、誓う。俺は死なない。そして、あんたを護る」

ま、護る必要はないだろうけどさ——カタナを納めながら、フェンはまた笑った。

女騎士は、あっけに取られたようにぽかんとした。そして、不機嫌そうにそっぽを向き、鼻を鳴らした。

「どうやら、馬鹿は死ななきゃ治らないらしいな。まったく——好きにしる」

踵を返して、歩き始める女騎士。フェンも後に続く。

「俺はフェン。フェン・リールだ。あんたは？」

「——オデッサ。オデッサ・シゼロ」

「そうか……。よろしく、オデッサ」

オデッサはふんと鼻をならした。

それが、まるですねた子供のように——フェンは、思わず笑った。

異端の女騎士、オデッサ・シゼロと、ホウマ族の剣士、フェン・リール。

これが、二人の出会い——そして、その旅の始まりだった。

二人はまだ、己に降りかかる運命を知らない。

『大剣の女騎士』 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8339q/>

大剣の女騎士

2011年10月8日02時24分発行